
忍たま乱太郎 忍術学園全員出動！の段

望月さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忍たま乱太郎 忍術学園全員出動！の段

【Nコード】

N3293T

【作者名】

望月さん

【あらすじ】

この話はアニメ忍たまの劇場版『忍術学園全員出動！の段』にオリキャラを入れた話です

もちろんネタバレはあります

更新は亀ですが、読んでみてください

第一話 遅すぎた夏休みの宿題の真相（前書き）

所々に変なカ所があるかもしれません

あまり気にしないでください

第一話 遅すぎた夏休みの宿題の真相

時は戦国。

世では幾多の国や城が戦をしていた。

その中で活躍をしていたのが、情報を集めたり、雇い主を守ったり、時には暗殺をしたりと、影の存在である忍者。

この話はそんな忍者の卵を育て上げる為の学園、忍術学園で起こった事件である。

忍術学園では長い夏休みが終わり、生徒の皆が久々の再会を果たしているところだ。

そんな中、一人だけ怠そうに机に突っ伏している生徒がいた。

「ZZZ…」

この小説の主人公、一年は組の幡谷凜之助ハタヤリンノスケである。

生徒が集まって来て、教室が賑やかになろうが凜之助には関係ないように寝ている。

そんな凜之助に近づく者が一人いた。

「おい、凜之助。いつまで寝てるんだよ。寝てる場合じゃないぞ」

「んー…なんだよ庄左卫門…」

凜之助は机に突っ伏したまま答える。

彼に話しかけたのは、黒木庄左卫門。

一年は組の学級委員長であり、このクラスの中では一番に成績が良い。

「凜之助、聞いてなかったのか？宿題が大変な事になってるんだ…
…と言っても、凜之助はどうせやって来てないだろうから関係ない
だろうけど」

「…宿題？」

その単語が出てようやく凜之助は顔を上げて庄左卫門を見た。

……すごく不満そうに。

「…なにさ、その顔は」

「宿題ならやって来たよ。いつもやってないと思ったら大間違いだぜ」

「え？凜之助が？」

庄左衛門が驚くのも無理はない。

凜之助が力を発揮するのは実技教科や、実戦の時だけなのだから。

普段の教室での授業で寝ては教科担当の土井先生に怒られ…、

『凜之助！起きろ！！』

『ZZZ…』

筆記試験ではやる気が起きず…、

『凜之助…お前またテストで0点なんだが…！！』

『ぼーっとしてたら時間が無くなってました』

宿題はいつもやって来ない…。

『また宿題やらなかったのか！？やって来いっていつも言ってるだろっが——！！！！』

『すいませーん』

『凜之助——！！！！』

『土井先生！落ち着いてください！』

不真面目な凜之助の態度に怒り狂う土井先生をなだめるのは、一年は組の皆であるのだ。

「土井先生が聞いたら泣いて喜ぶだろうなあ…。」

「これだけで？」

「それだけの事を今までやらなかったんだろ」

「…それで宿題が…」

どうかしたのか？と、庄左卫門に尋ねようとした時、教室の扉の開き、三人のクラスメートが入ってきた。

「『『『やっほー！』』』」

「『やっほー』ってそれどころじゃないんだって！」

すかさず庄左卫門が三人の所へ行ったため、暇になった凜之助は三人と庄左門の元へ向かった。

「よ、相変わらず呑気だな。お前らは」

「あ、凜之助、久しぶり！」

「おーっす」

「久しぶりー」

凧之助に言葉を返した三人組は、上から順に乱太郎、きり丸、しんべエだ。

乱太郎の本名は猪名寺乱太郎で、足が速く、三人の中でまとめ役。

きり丸こと撰津のきり丸は小銭に煩く、“ただ”などの言葉に反応する。

そして最後のしんべエ、福富しんべエはぼっちゃりしていて、見た目通り大食いである。

「呑気なのは凧之助もだろ」

「あ、そう？」

庄左卫門が凧之助にツッコミを入れ、夏休みの宿題について説明を始めた。

「今回の夏休みの宿題、みんなバラバラだろ？」

庄左卫門が四人に確認すると、一人を除いて頷いた。

「…え？そうなの？」

「…凜之助」

凜之助が素っ頓狂な声を上げると、乱太郎が呆れたように苦笑いをした。

「凜之助まで土井先生の話聞いてなかったんだね…」

「うん寝てたかも。まあ把握したから続けて」

先を促された庄左衛門はため息をつきながら、話を続ける。

「それがさ、一部の忍たまの宿題が入れ替わってたんだ」

「…どゆこと？」

「…事務員の小松田さんのミスでさ、生徒全員分の宿題を運んでたらこけたらしくて、中身を全部出しちゃったらしいんだよ。それを適当につめ直したもんだから混ざっちゃって…」

「それって俺の宿題を乱太郎がやってくれてたりとか？」

「きりちゃん…」

あまりに嬉しそうにきり丸が言うので、思わず苦笑いの乱太郎。

「いや、それどころか六年生が一年生の宿題をやっていたりするんだ」

と、話に入ってきたのは加藤団蔵。

その団蔵の言葉により六年生が昆虫採集やアサガオの育成をやっているところを想像し、みんな笑う。

しかし、凜之助や庄左卫門は笑わず、別の可能性を考えていた。

「…逆に言えば、一年生が六年生の宿題に当たる場合もあるって事だよ」

庄左卫門の言葉に空気が凍り付く。

そんな空気の中、乱太郎が口を開いた。

「庄ちゃんたら相変わらず冷静ね…」

しかし、庄左卫門は乱太郎の言葉を無視し、続ける。

「喜三太がまだ登校してないのが気になるんだ」

「喜三太まだ来てないの？」

そこで山村喜三太のルームメイトの皆本金吾が口を開く。

「夏休み前に喜三太がいつてたんだ。“宿題が難しすぎる”って」

「それって…」

「喜三太に六年生の宿題が当たったって事だな」

言葉を発してなかった凜之助が言う。

「宿題のプリントを小松田さんに任せるなんて、先生達も無責任すぎるよ」

佐武虎若が言う。

続けてしんべエも意気込んで言う。

「宿題ができなくて学校に行きたくない子供の気持ちがあわかってないっ!!」

「俺達やらずに来たけどな」

きり丸が思わず言った言葉にしんべエは苦笑いした。

そんな二人に構わず、乱太郎は呟く。

「喜三太かわいそうに。今頃どこかで泣いてるかもしれないね」

その言葉でしーんとなるは組の皆。

凜之助はそんな皆を元気づけるように比較的明るい声で言う。

「なら喜三太の宿題を手伝ってやるっぜ。さすがにこんだけいりや出来るだろ」

「よし!皆で喜三太を探しに行こう!」

さすがは学級委員長。

庄左卫門の一声で途端に皆が元気になった。

「そうと決まれば出発だ!!」

「おい!ちよつと待て!」

今にも飛び出そうとしているは組の皆を呼び止めようとする凜之助。

「どこ行くか分かってんのか!？」

その言葉に庄左卫門が急に立ち止まった。

「そうか、今先生方がどんな宿題が出たか調べてるんだった。それがわかれば……うわっ!？」

庄左卫門が後ろを向くとそこには、止まりきれずに前の人に顔をぶつけてしまったは組の皆が倒れていた。

「良い子は急に止まれない〜」

それを凜之助は呆れた目で見ていた。

「…馬鹿だろお前ら」

第一話 遅すぎた夏休みの宿題の真相（後書き）

と、いう訳で、始まってしまいました。忍たまの二次創作

あまりキャラに自信はありませんが気にしないでください

第二話 結成！選抜チーム！（前書き）

伊作先輩ってカッコイイですね

望月です

ここから主人公視点でいきます

どうぞ読んでってください

第二話 結成！選抜チーム！

学園長の思い付きにより、喜三太を救出するための選抜チームが作られた。

選ばれたのは夏休みの宿題をやって来なかった生徒達。

一年は組

撰津のきり丸

読書感想文。

人のを写すつもりで手をつけず。

「だってバイトで忙しかったんだもん」

一年は組

福富しんべエ

漢字ドリル。

人のを写すつもりでつもりで手をつけず。

「そのかわりおいしい物いっぱい食べたよ」

三年ろ組

神崎左門

農業体験実習。

何故か目的の農家に辿り着けずに終了。

「二年の宿題だったのか〜！」

四年い組

平滝夜叉丸

一年用社会学ドリル。

「もらってすぐに破り捨ててやったわ！学園一成績優秀な私を馬鹿にするなー！！」

五年ろ組

不破雷蔵

三年用理科ドリル。

疑心暗鬼が過ぎて手をつけられず。

「こんな簡単な宿題なんてどついつ事…？お前の実力はこの程度と
いう事なのか…？！」

五年ろ組

鉢屋三郎

付き合いで宿題放棄。

「雷蔵はしょうがないよ」

六年は組

善法寺伊作

四年用の宿題“タソガレドキ軍の旗を奪え”。
手に入れた旗を全て裂いて包帯にしてしまい失格。

「ちゃんと旗一本分持ち帰ったんだけどな…」

以上の7人が選ばれた。

「そつえば、凧之助の宿題はなんだったの？」

珍しく凧之助がやってきた宿題の内容が気になり、尋ねてみる乱太郎。

「俺の？えーっと…“ドクタケ城の殿様の馬のやつを盗る”だったな」

「…え？あの馬のやつ？」

「うん、馬のやつ」

「…それって」

乱太郎は一旦言葉を切り、息を深く吸い込んだ。

「高学年の宿題どころか六年生用の宿題じゃないの!!??」

「今思うとそうだったかもな」

驚いて声を荒げる乱太郎と呑気に答える凜之助。

「煩いなあ…耳元で叫ぶなよ。」

「しかも合格って事は盗って来たんだよね…」

「うん。学園長と土井先生と山田先生に盗ったやつ見せたら凄く驚いてたな」

その時の目を丸くしていた三人を思い出し、くすつと笑う。

土井先生にいたっては、驚きのあまり頬を抓って夢じゃないか確か

めていた。

「凜之助の実力は分かってたつもりだけど…これほどなんて…」

前にも言った通り、凜之助は実技や実戦に強い。

六年生にも引けをとらない程に。

それなのに一年は組にいる理由は、普段の教科の成績がとてつもなく悪いからである。

土井先生がため息をつくどころか泣く程に。

「ちなみに馬は先生達に見せた後、ドクタケ城の近くに捨ててきた」

「捨てたの！？誰にもバレずに!？」

「うーん…稗田八方斎にはバレたかもなあ。あいつが馬盗んで捨てたって事にしておいたから」

「凜ちゃん…さすがだね…」

殿様に怒られている稗田八方斎を思い浮かべて、思わず同情と苦笑

いをする乱太郎。

「乱太郎！凜之助！そろそろ選抜チームが出発するぞ」

そんな二人の側に土井先生が選抜チームの出発を知らせる為にやって来た。

「あ、はい！いま行きます！」

「俺も行きたかったなあ……」

「馬鹿な事言っていないで行くぞ」

乱太郎は急いで、凜之助は土井先生に引っ張られながら門に向かった。

「きり丸、しんべエ、頼んだよ」

「おう！」

「行つて来るね！」

心配がまだ拭い去れない乱太郎は、選抜チームに選ばれたきり丸としんべエに言う。

土井先生は、引率の先生に挨拶をしていた。

「厚着先生、日向先生、よろしくお願いします」

「うむ」

その返事を最後に、選抜チームは門をくぐり、喜三太を助けに向かった。

しばらくそれを見送っていた一年は組の生徒達だが、乱太郎が疑問を投げかける。

「でも土井先生。なぜ先生や山田先生は一緒に行かれないんですか？」

「あ、それは俺も思った」

「あー…それには訳があつて…」

歯切れ悪そうに答える土井先生の言葉の途中で、一人の男が馬を引いてやってきた。

「若旦那！」

若旦那とは加藤団蔵の事である。

「清八！どうしたの？急ぎの荷物でも？」

「いえ、急ぎの老人を運んできて、今帰りを待っているんです」

荷物を老人に変換させ答える清八。

「急ぎの老人？」

団蔵やは組の生徒達の頭にハテナが浮かぶ。

それを見た土井先生が苦笑いをしながら、こう言った。

「それが私達が残っている理由だ」

「園田村の乙名の手鴻潔齋と申します」

急ぎの老人、手鴻さんは手を床につけ深々と頭を下げた。

「オトナ…って、そりゃ子供には見えませんわな」

「アホ、乙名とは村の長老の事だ！」

団蔵のボケに素早く突っ込む土井先生。

今、凜之助達は学園長の部屋にいる。

部屋の中にいるのは土井先生と山田先生、学園長、山本しな先生、そして手瀉さんと一年は組の皆だ。

ちなみに山本先生は今はお婆さんの姿である。

「みんなオーマガトキ城とタソガレドキ城の戦の事は聞いてるな」

確か…土井先生辺りがそんな事を言ってたな…。

オーマガトキの方が旗色が悪いんだっけ？

庄左卫門が皆を代表して山田先生の間へ答える。

「はい。喜三太がオーマガトキ城に行っていないかと心配しています」

さすがは優等生。

仲間を心配する姿は立派だ。

「うむ、手瀉さんの園田村もオーマガトキ領にあるのだが、戦に負けるとタソガレドキ軍がなだれ込んで来る」

戦はいつだって残酷だ。

罪もない村や人が犠牲になっていく。

山田先生は詳しい説明を続ける。

「タソガレドキ軍は村を制圧するため、食料や家財を奪い、田畑を荒らし村を焼き払うだろう」

「はっきり言ってオーマガトキに勝ち目はない！」

はっきり言いすぎなのでは手瀉さん…。

はっきり言ってしまった手瀉さんはさらに続ける。

「そこで負けた時のために密かに敵に通じてタソガレドキの城主、黄昏甚兵衛から“かばいの制札”を貰おうと村中の金を集めました」

「カバの警察？」

再びボケた団蔵にすかさず土井先生はまた突っ込む。

カバの警察なんて貰っても意味無いだろうが…。

てゆーか無茶苦茶な変換させるなよ。

「放火をするな、荒らすな殺すな、軍勢による乱暴を禁止する禁制の事だ」

いつもいつもご苦労様です土井先生。

「それで手潟さんは制札をもらえたんですか？」

「…もらえていたらここに来る必要もなかっただろうな」

乱太郎の言葉に否定の意味を込めて言ってみる。

しかし、乱太郎には伝わらなかったようだ。

……どんだけ頭弱いんだよ……。

「お察しの通り、金品を支払いましたが制札は貰えず、加えて馬の飼料の大豆まで要求される始末です」

「きり丸が聞いたら血の涙を流しそうな話だな…」

ああ…確かに。

兵太夫の言葉で泣ききり丸が簡単に思い上がり、思わず苦笑する。

「それで困り果てた手瀉さんは学園長先生に相談に来られたの」

今まで黙っていた山本先生が納得したようにいった。

「そ、そう！黄昏甚兵衛は評判の悪い大名じゃ。制札をエサに次々と要求を出してくるかもしれん」

かっこよく言った学園長だが…俺は見たぞ。

山本先生が学園長の名前を出した途端にビクツと起きたところを。

あんた…今まで寝てたな？

「それに…この事がオーマガトキ側にバレると厄介なことになる」

「戦線はひと月前の激突以来、タソガレドキ軍の圧倒的優位のまま…不思議なニラミ合いが続いていますな」

「不思議なニラミ合い？」

山田先生の言葉に不思議がる団蔵の言葉に反応して、庄左卫門と団蔵と凧之助以外の生徒が睨み合う。

それにとつとつキレた土井先生が睨み合っていた生徒達を殴った。

「フシギなニラミ合いをするなー!!」

「とつとつに勝負がついてるはずなのにつかないのが不思議だと言っ
とるんだ」

呆れたように言う山田先生。

「話が脱線して大変ですな」

手嶋さんがそう言うと、

『困ったもんです』

と、声を揃えて言う良い子の生徒達。

…俺はなんでこんな奴らと同じ組なんだろう…。

コホンと咳をして場を整える学園長。

「そこでこの戦がどう決着するか、両軍の印を取る必要がある」

「はい！印を取るって何ですか？」

無駄に元気にきく乱太郎。

その間に土井先生が怒りを抑えるように答える。

「兵力、兵站、戦術などを詳しく調べる事…！教えたハズだろ…！」

すると、一年は組の生徒達が集まり、何やら会議を開いてる様子。

…あれ？俺もは組なんだけど…仲間外れ…？

てゆーか嫌な予感しかな

『僕達が印を取りに行つて来まーす!!』

やっぱりいいいい!!

なんでお前ら面倒事に首を突っ込みたがるんだ!!

…まあ学園長が許可しなけりゃ

「うむ、許可する」

学園長おおお!!!!

あんた絶対面倒臭くなつだろ!!!!

そんなこんなで凜之助達が印を取りに行く事が決定してしまった。

凜之助は知らない。

一度乗ってしまった船は降りれない事を。

そしてその船が嵐に向かっていているという事を…。

第二話 結成！選抜チーム！（後書き）

原作の落第忍者乱太郎を探しています

望月です

どうだったでしょうか？

口調が変なキャラはいませんでしたか？

ぶっちゃけ一年は組以外の忍術学園の生徒の口調は分かりません

それでも読んでくれるそのあなた

そう、あなたです

本当にありがとうございます

これからも見捨てないくださいね

怒涛波乱の道中（前書き）

綾部先輩カッコ可愛いですね

望月です

キャラのイメージが違う！
と言われても何もできません

私の中ではこうなんです

怒涛波乱の道中

忍術学園から出発した一年は組と土井先生と山田先生。

道中の山の中の廃寺の前まで来た。

「おちあう場所はこの廃寺だ！」

土井先生が率いるオーマガトキ組は乱太郎、金吾、団蔵、凜之助。

「先生、僕達も喜三太を探しに行きたいです！」

「両軍の印を取るのが目的なんだぞ。我慢しなさい」

山田先生が率いるタソガレドキ組は庄左エ門、兵大夫、三次郎、伊助、虎若。

オーマガトキ城とタソガレドキ城の印を取るため、二手に別れた。

そして、別れてからまたしばらくすると人影が見えた。

その人影とは…。

「しんべエ!?!」

「と、きり丸!?!」

「俺はついでかよ!」

おまけのような扱いをされて元から不機嫌だったきり丸がさらに不機嫌になる。

しかし、きり丸をおまけ扱いしてしまったのは仕方が無いだろう。

何しろしんべエが別れる前の倍に太っていたからだ。

…まあなんできり丸が不機嫌なのかは知らないが。

「ど…どしたの二人とも」

「オーマガトキ城下に潜入したんじゃ…?」

苦笑いの乱太郎に続き土井先生が尋ねる。

どーしたもこーしたもと、きり丸が不機嫌な顔のまま答えた。

「僕ら物売りに化けて調査しようとしてたんですけど…腹を減らしたしんべエが売り物の団子を全部食べちゃって…」

「…それでそんな太ったのか」

「そんで動けるようになるまで待つてる事になったんです」

「きり丸は付き添いでーす」

反省はしてないのか腹が膨れて満足したのか、しんべエは陽気に言った。

…きり丸も可哀相だな。

「日向先生、厚着先生お気の毒に…」

皆苦笑いである。

そんな中、土井先生が気を持ち直しきり丸としんべエにオーマガトキ城の状態をきいた。

「で、きり丸。オーマガトキの様子はどうだ？」

「それが妙なんですよ」

きり丸が言うには、負け戦だから士気が低いが緊張感にかけてるらしい。

タソガレドキ軍は山ひとつ向こうまで迫って来るといっているのに。

それをきいた土井先生は顎に手を当て考え始めた。

「喜三太の手掛かりは見付かったの？」

喜三太が気になり、いてもたってもいられない乱太郎が心配そうにたずねる。

「ごめん、まだんだけど…それとは別に変な噂が流れてるんだ」

「変な噂？」

「どんな噂なんだ？」

「城主の大間賀時曲時がお城の中にいなくなって行方が分からないって言うんだ！」

「え？戦の真つ最中に？」

…どうしても太ったしんべエの頬が気になっただらしい。

土井先生と凜之助以外がしんべエを弄り始めた。

「本当なら大変な事じゃないの？」

「大変だよ。もしタソガレ軍が攻めて来てもオーマガは戦うところじゃないぜ」

弄りに参加しなかった土井先生は何か納得しないように口を開く。

「…それでもタソガレドキは攻めて来ない…か」

…これは一体なにを示しているのか。

オーマガトキの城主が寝返ったのか？

「私は選抜チームと連絡をつけてくるので、お前たちはここで待機。軽く腹ごしらえをしときなさい」

「わかりましたー」

「しんべエは食べない!!」

元気良く言うしんべエに土井先生は怒ったように突っ込む。

「…先生、俺も」

「凜之助も待機だ。乱太郎たちだけじゃ頼りないからな」

…ちっ俺もオーマガトキに潜入したかったのに。

「いいか?くれぐれも単独行動などの無茶はするなよ」

「はい」

土井先生はそう釘を刺すと颯爽と行ってしまった。

「私たち待機しに来た訳じゃないんだけど…」

「ねえ」

乱太郎がぼつりと呟いて、しんべエがそれに頷いた。

待ってるだけじゃ暇だもんなあ。

「じゃあそうじゃなくしよう！」

何か提案があるのか、きり丸は何処からか大きい着物を取り出した。

「なにこれ？」

「オーマガトキの夫丸の制服だよ」

夫丸とは合戦城で荷物を運んだりする人の事である。

…かなりでかいな。

どうやって手に入れたのかというと…。

きり丸が持つて行った弁当を生米と取り替えて、米を酒と取り替えて、酒をコシヨウと取り替えて、コシヨウを制服と取り替えたらしい。

「これ凄く大きい服だね…レレレサイズ？」

「スリーエルサイズだよ」

「エルとは大きいサイズの事だ。ちなみに小さいサイズはエスだ」

乱太郎はなるほど、と手を打った。

「凜之助は物知りだね」

「…なんでその知識をテストで活かせないんだよ」

「…きり丸」

「げっやべっ！」

ボソツと小さい声で言ったらしいが、俺にははっきり聞こえたぞ。

二度とそんな事言えないように体に教えるべきか…？

きり丸に迫る凜之助の前に乱太郎が慌てて出る。

「まあまあ！それでその夫丸の制服でどうするの？」

…ちつ。

後で覚えとけよ。

「あ、ああえつと…これを太って頭の大きくなったしんべエに着せて、肩車で背を高くすれば大人の夫丸として潜入できるぜ」

『あつー！』

きり丸の言葉に全員の声が重なる。

…さすがきり丸だな。

頭の回転が速いというかなんというか…。

前に乱太郎、その左右に金吾と団蔵、その上にきり丸、さらにその上にしんべエが肩車され、前を着物で隠して大人の夫丸が完成した。

…ちなみに、凜之助は後ろで支えている。

「…ってこれじゃ六本足だよ」

「後ろからだど八本足だな…」

「分かんないって！」

「まる見えじゃん…」

「…重い」

上から順に、乱太郎、凜之助、きり丸、金吾、団蔵である。

とりあえず、進んでみようとして、足をそれぞれ動かしてみるが…。

あっちによたよたこっちによろよると、まったく前に進まない。

さらにはどんどんスピードが出て、止まれない状態になってしまった。

『うわあああ〜!?!?!?』

ついには崖から飛び出て森の中に落ちてしまった。

「なんだこれ!?!?どうなって落ちてんだよ!?!?」

「きりちゃん落ち着こうよ!」

「凜之助!どうにかならないの!?!?」

「そつだよ!凜之助ならなんでも出来るだろ!?!?」

「出来るわけねーだろ!?!?ってゆーかしんべエの頬らしき物で何も見えねー!?!?!?」

『うわああああ!?!?!?!?』

「うひゃー！？」

嫌な音がした。

どつやら地面に着陸したらしい。

「あたたた…」

「あつしんべエの顔戻ってる！」

「風圧による引き締め効果ってやつだな」

「その知識をテストで活かせないのか？」

「うるせえ！」

「ねえ！」

どつやら団蔵が何かを見付けたりらしい。

森の奥の方を指差す。

「あのおっさん！」

そこにはおっさんが一人いた。

どうやら凧之助達が落ちた時にぶつかったらしい。

頭を押さえて唸っていた。

しんべんにそっくりなおっさんだった。

しんべんにそっくりなおっさんは、さっきの衝動で脱げてしまった頭巾を被り直す。

そこで、乱太郎が着ていた服の背中 of 模様を目敏く発見する。

「おじさん、オーマガ軍の人でしょ？私達迷子の夫丸なんです。一緒に城に帰りませんか？」

「そ、それは困るっ困るぞー！！」

…何が困るんだ？

「…夫丸が一人でこんな森にいるなんて…おっさん怪しい！」

きり丸がそう指摘すると、明らかに怪しい反応をするおっさん。

…小物臭がするな。

「あ、ギクツとした！ますます怪しい！」

しんべエがそう言うと、怪しいおっさんは颯爽と走り逃げて行った。

「…あ、怪しいのはお前らの方だー！！！」

…という言葉を残して。

「逃げたぞ！」

『追おうー！』

えー追うの？

小物臭たっぷりだから放っておいても…。

あー…行っちゃったし。

しょうがない、行くか。

しばらく怪しいおっさんを追いかける。

戻んなくて良いのかなー。

土井先生めちやくちや探してるだろうな。

「…こっちはタソガレの陳の方角だ」

「オーマガ軍の夫丸のくせに、やっぱり怪しい…」

乱太郎としんべエが怪しいおっさんの様子をつかがう。

すると、急に怪しいおっさんの近くに忍者が現れ、おっさんの着ていた服をタソガレの服に着替えさせた。

…オーマガ軍の裏切り者と見ていいかな。

そう考えたが、忍者が急にこっちを見たので慌てて隠れる凜之助達。

「……見付かったかな!？」

皆が冷やっとし、顔を青ざめる。

「とにかく一度戻ろう……！」

金吾の冷静な判断に、皆頷いた。

……危なかった……。

元いた場所に戻ろうとする中、凜之助が一人立ち止まった。

「……………」

「凜之助?」

「どうしたの？」

きり丸としんべエが振り返り、他の三人も立ち止まる。

「いや…なんか落としたかも」

「財布か！？財布なら俺も探すぞ！！」

「きりちゃん…」

お金の事となると豹変するきり丸に、苦笑いする乱太郎。

そんな二人を見て呆れたように息を吐く。

「ちょっと取りに行ってくるから先に行つてて」

「一人で行くの？私も行こうか？」

乱太郎が少し心配そうに言う。

しかしこれからやる事を考えると、凧之助以外は足手まといにしかない。

それに、「ここで止まった意味がない。」

「いいよ。見付けたらすぐに追いつくから」

「んー…分かった。すぐ来てね」

「分かってるって」

五人は心配そうに凜之助を見ていたが、やがて歩き出し、そして見えなくなった。

「…行ったな…さて、出て来いよ、上に隠れてる奴。あいつらは」
まかせても、俺にはごまかせねーぜ」

凜之助はそう言いながら、ある一点に石を投げた。

甲高い音が響き、一人の忍装束をまとった男が下りてきた。

「…なかなかやるようだな」

「はいはい、お決まり文句をどーもっ！」

忍者が投げしてきた手裏剣を寸でで避け、石を投げ返す。

忍者はクナイではじいた。

「何者だ。ただの子供ではあるまい」

「…ただの村の子供Aだよ」

「…たわけっ！」

今、私服である凜之助は忍術学園の生徒と言うわけにもいかず、適当にはぐらかす。

しかし、忍者のほうもそれで納得がいかないらしい。

…当たり前なんだけど。

「ただの子供だと思って加減はしたが、本気で行く」

「子供だからってなめんなよ？」

忍者はクナイを持って凧之助に突進し、動きを封じようとする。

「どうやら捕らえるつもりらしい。」

対する凧之助は武器を持っていない。

石を投げるくらいしか攻撃手段がないのだ。

凧之助は石とともに砂を拾い、突進してきた忍者目掛けて砂ごと投げた。

「!？」

突然の事で反応出来なかった忍者は、目に砂が入ったらしく一瞬だけ怯んだ。

その隙に凧之助は忍者が持っていたクナイを取り上げ、刃の先を忍者に向けた。

「動くなよ」

「くっ…砂で目潰しなんて…」

「丸腰の子供相手に刃物向けてきたあんに、何も言われたくねーよ。さて、色々吐いてもらおうか」

「……………」

凜之助はクナイを向け、警戒をしたまま、忍者をじっくり見る。

「あんたタソガレドキ忍者だな。ちょうど良いや。あんたらの殿様は何を考えてんだ？やる気ねえ戦しやがって」

砂のせいで軽く涙目の忍者は口を開かない。

さすが本職の忍者だな。

ただでは口を割らないか…。

「言わねえならこっちにも考えが…」

そこまで言って、ようやく忍者が口を開いた。

しかし、出てきた言葉は凜之助が期待していたものではなかった。

「…あまり大人を」

「なめるな」

すぐ後ろで声がし、凧之助が気付いた時には既に、クナイの先が頭をとらえていた。

「…ちっ」

「まったく…遅いから様子を見に来てみれば…」

「組頭…すいません」

組頭…タソガレドキ忍者の組頭か。

凧之助はそう思い小さく舌打ちをした。

凧之助に気づかれず背後に立った事から、彼がかなりの実力者だという事が分かる。

めんどくせえ…。

「とりあえず、私の部下に向けている武器を捨ててもらおうか」

「……………」

凜之助は無言でクナイを捨てる。

地面にクナイが音もなく転がった。

「武器捨てたんだからあんたも俺に突き付けてるクナイ退かしてくれよ」

「…いいだろう」

駄目元で言ってみると、思いのほかクナイを退かしてくれた。

…武器さえなけりゃこっちのもんだ。

凜之助はクナイの気配が消えると、振り向きざまに足を振り上げた。

「組頭！」

「…いきなり蹴るなんて酷いな」

「……………」

回し蹴りをしようとした凜之助の足は、さつき怪しいおっさんと一緒にいた、包帯が顔に巻かれていて右目しか出てない男、組頭の手によって止められていた。

「放せ」

「この餓鬼！組頭になんて事を…！」

「…ちょうど良い。このまま連れて行く」

「は！…ちょっとまっ…うわっ！？」

掴まれた足がそのまま上に上げられ、気付くと凜之助の視界は逆さまになっていた。

組頭と身長差がかなりあるため、組頭によって逆さまに吊り下げられている体制になっている。

「組頭、こんな餓鬼どうするんですか？」

「これがただの子供ではない事は分かっているだろ。城で正体を吐

かせる」

「これとか言うな！放せ！！」

やばい…非常にやばい！

もし本当に連れてかれて単独行動が土井先生にバレれば…。

怒るところの話じゃない！

それに、捕まった俺を助けようと一年は組の皆が乗り込んできたら…。

それだけは避けたいと、凧之助が暴れようとした時、足を掴んでいる組頭の腕目掛けてチョークが飛んできた。

「…」

組頭は思わず、足を放して腕を引っ込める。

そして、支えのなくなった凧之助の体は重力にのっとなって、地面に落ちてゆく。

やばい…落ちる。

顔から落ちるなんて格好悪い事したくない…でも間に合わない…！
終わった…と諦めて、顔からくる衝撃に堪えようと、歯を食いしばる。

「……………？」

顔からの衝撃どころか、再びやってきた浮遊感を不思議に思い、目を開けてみると、

「ぎりぎりセーフ…」

土井先生に荷物のように抱えられていた。

何がぎりぎりセーフなんだ？

俺にとっては土井先生に見付かった時点でアウトなんだけど…。

「この子は私の大事な生徒なんでね。連れて行かれては困る」

「……………」

組頭と土井先生は睨み合いを続けるが、しばらくすると、

「ひくぞ」

「はい！」

タソガレドキ忍者の方から折れて、姿を消した。

組頭達がいなくなり、一気に緊張感が抜けたため、深くため息をついつしまった。

「…ため息をつきたいのは私のほうだ…！」

目敏く凜之助のため息を見逃さなかった土井先生は、そのままの体制で説教を始めた。

「だいたい、お前はいつも一人で無茶をして…今回もそうだが夏休みの宿題もそうだ。いつもはやって来ないくせにあんな危険なやつばかりやって…！」

あー…これはしばらくかかりそうだなあ。

助けてくれたのは嬉しいけど、説教が長いからな…。

「…心配、したんだからな」

「…！…すみません」

珍しく怒鳴らないところを見ると、本気で心配をかけてしまったようだ。

凜之助も珍しくふざけないで謝った。

…しかし。

「…あのー…いつまでこの体制なんですか？そろそろ頭に血がのぼってきてキツインですけど」

「…心配かけた罰だ。しばらくこのままにいる」

「えー」

さつきからずつと体が逆さの状態にいる凜之助。

…そろそろマジで頭がヤバイんだけど…。

…鬼かこの人は。

「あ、土井先生ー！凜之助ー！」

…ああ、なんかすっげー元気な足音が聞こえる。

遠くから自分達を呼ぶ声が聞こえ、そちらに顔を向ける。

…。すこし離れた所に乱太郎ときり丸、しんべん、団蔵、金吾、そして

「…善法寺伊作先輩？」

何故か六年生の不運委員長がいた。

「や、怪我はしてないかい？」

「たった今、頭が破裂しそうです」

「あはは…」

「当たり前前の罰だ。自分一人だけ目立とうとしやがって」

きり丸がそう言うつと、他の四人も、そーだそーだ、と声を揃えて抗議する。

お前らがいても足手まといでしかなかったらろうが。

伊作先輩は凜之助の不満そうな顔を見て、こっそりと凜之助に言った。

「ああ言ってるけどね、皆すごく君の事を心配してたんだよ。皆素直じゃないね、君もだけど」

そう言った伊作先輩は、弟を見るような優しい笑顔だった。

怒涛波乱の道中（後書き）

どうも

いかがでしたか？

望月です

軽くオリジナル入れました

すみません

調子のとってすみません

これからも調子にのります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293t/>

忍たま乱太郎 忍術学園全員出動！の段

2011年10月9日01時52分発行